

SPARC T5-1B サーバーモジュール

設置ガイド

Copyright © 2013 , Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMD ロゴ, AMD Opteron ロゴ は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

1. このドキュメントの使用方法	5
プロダクトノート	5
関連ドキュメント	5
フィードバック	5
Oracle サポートへのアクセス	6
2. サーバーモジュールの概要	7
関連情報	7
設置タスクの概要	7
関連情報	8
サーバーモジュールの概要	8
関連情報	9
フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント	9
関連情報	10
3. サーバーの仕様の確認	11
関連情報	11
物理仕様	11
関連情報	11
電気仕様	11
関連情報	12
環境仕様	12
関連情報	12
4. 設置の準備	13
関連情報	13
目録	13
関連情報	14
取り扱い上の注意事項	14
関連情報	14
ESD 防止対策	14
関連情報	15
設置に必要な工具	15
関連情報	15
設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する	16
関連情報	17
ドングルケーブル	17
関連情報	19
5. サーバーモジュールの設置	21
関連情報	21
モジュラーシステムとサーバーモジュールを準備する	21
関連情報	22
オプションのコンポーネントを設置する	22

関連情報	22
サーバーモジュールをシャーシに挿入する	22
関連情報	24
6. サーバーモジュールへの初めての電源投入	25
関連情報	25
ホストへの初めての電源投入	25
関連情報	26
CMM (Web インタフェース) からホストに電源投入する	26
CMM (CLI) からホストに電源投入する	27
フロントパネル (CLI) からホストに電源投入する	29
CMM SER MGT ポート (CLI) からホストに電源投入する	31
OS のインストール	32
関連情報	33
プリインストールされている OS を構成する	33
Oracle Solaris の構成パラメータ	33
新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)	36
新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)	38
静的 IP アドレスを SP に割り当てる	39
関連情報	40
用語集	41
索引	45

1

・・・ 第 1 章

このドキュメントの使用方法

このドキュメントでは、Oracle Sun Blade 6000 モジュラーシステムに Oracle SPARC T5-1B サーバーモジュールを設置するときに役立つ、作業手順と参考資料を示します。

- [5 ページの「プロダクトノート」](#)
- [5 ページの「関連ドキュメント」](#)
- [5 ページの「フィードバック」](#)
- [6 ページの「Oracle サポートへのアクセス」](#)

プロダクトノート

この製品の最新情報と既知の問題については、次の『プロダクトノート』を参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/T5-1B/docs>

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
SPARC T5-1B サーバーモジュール	http://www.oracle.com/goto/T5-1B/docs
Sun Blade 6000 モジュラーシステム	http://www.oracle.com/goto/SB6000/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Solaris 11 OS	http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs
Oracle Solaris 10 OS	http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs
Oracle VM Server for SPARC	http://www.oracle.com/goto/VM-SPARC/docs
Oracle VTS	http://www.oracle.com/goto/VTS/docs

フィードバック

このドキュメントについてのフィードバックをお寄せください。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通じて電子サポートにアクセスできます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> または聴覚に障害をお持ちの場合は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

・・・第 2 章

サーバーモジュールの概要

次に示すトピックでは、サーバーモジュールおよび設置タスクについて説明します。

- [7 ページの「設置タスクの概要」](#)
- [8 ページの「サーバーモジュールの概要」](#)
- [9 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」](#)

関連情報

- [第3章](#)

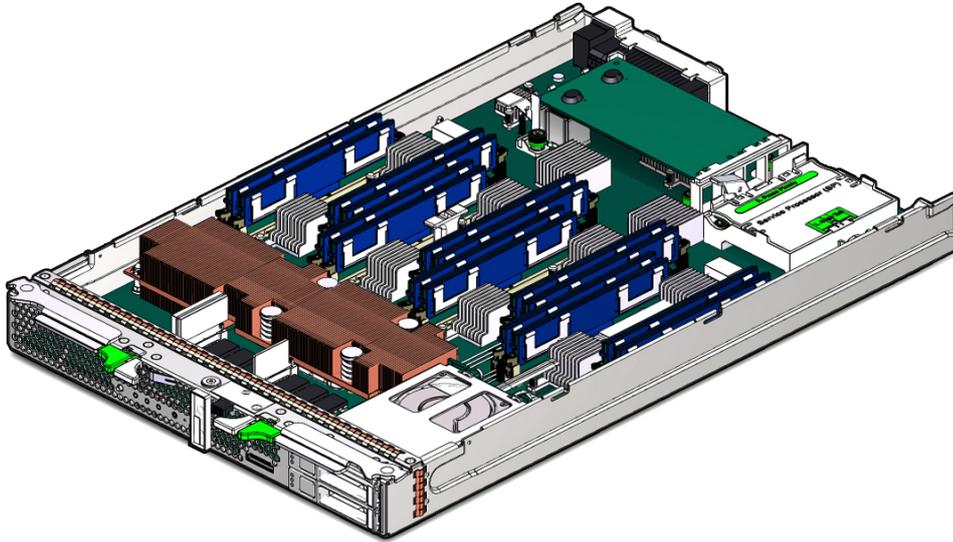
設置タスクの概要

手順	説明	リンク
1.	プロダクトノートで最新のニュースを確認します。	『SPARC T5-1B サーバーモジュールプロダクトノート』
2.	サーバーモジュールの機能とコンポーネントを確認します。	8 ページの「サーバーモジュールの概要」 9 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」
3.	サーバーモジュールの要件を確認します。	第3章
4.	注文したすべてのアイテムを受け取ったことを確認します。	13 ページの「目録」
5.	安全性および ESD 防止対策を確認します。	14 ページの「取り扱い上の注意事項」 14 ページの「ESD 防止対策」
6.	必要な工具類を用意します。	15 ページの「設置に必要な工具」
7.	設置中にサーバーモジュールに接続する方法を選択します。	16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」 17 ページの「ドングルケーブル」
8.	サーバーモジュールにオプションのコンポーネントを設置し、サーバーモジュールをシャーシに設置します。	第5章
9.	はじめてサーバーに電源を投入します。	第6章
10.	ホストの OS を構成します。	32 ページの「OS のインストール」
11.	(オプション) 静的 IP アドレスを SP に割り当てます。	39 ページの「静的 IP アドレスを SP に割り当てる」

関連情報

- ・ [8 ページの「サーバーモジュールの概要」](#)
- ・ [9 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」](#)

サーバーモジュールの概要



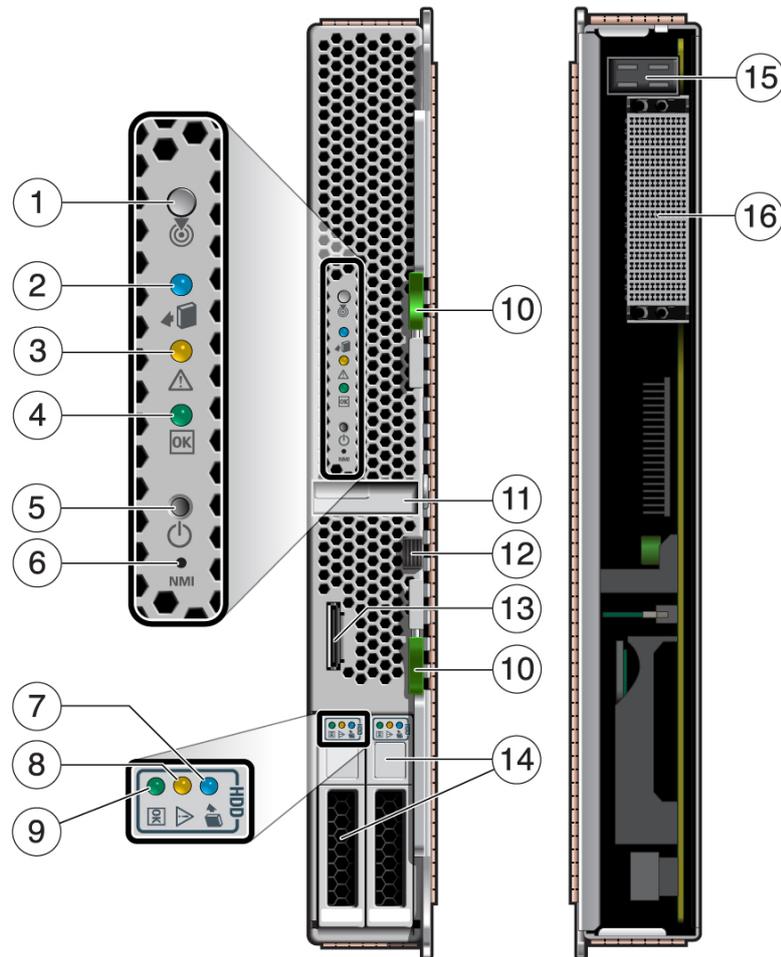
機能	説明
プロセッサ	1 基の 16 コア 128 スレッド SPARC T5 プロセッサ。
アーキテクチャー	SPARC V9 アーキテクチャー、ECC 保護。 プラットフォームグループ: sun4v。 プラットフォーム名: SPARC T5-1B。
メモリー	16 スロット対応 8GB または 16GB DDR3 DIMM
Ethernet	2 つの 10/100/1000GbE ポート
HBA	1 基のオンボード SAS/SATA RAID 0 または 1 コントローラ (2 基の内蔵ドライブを制御する)。
内蔵ドライブ	最大 2 基のホットプラグ可能 2.5 インチ SAS-2 ハードドライブまたは SATA ソリッドステートドライブ。
フロントパネル I/O	1 つの UCP コネクタ。ローカル KVMs をサポートするには、UCP-3 または UCP-4 ドングルケーブルを使用して、次のサーバーモジュールインタフェースにアクセスします。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 2 つの USB 2.0 ポート ・ 1 つの RJ-45 シリアルポート ・ 1 つの DB-15 SVGA ビデオポート
ミッドプレーン I/O	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 つの x8 PCIe インタフェース (NEM と PCIe EM に 2 つずつ、Gen2 速度で動作する) ・ 2 つの 10/100/1000GbE インタフェース (NEM ごとに 1 つずつ) ・ 1 つの CMM への 10/100 Ethernet 管理ポート
OS	Oracle Solaris OS

機能	説明
	<p>注記</p> <p>プリインストールされているソフトウェアおよびサポートされる Oracle Solaris OS リリースに必要なパッチの詳細については、『<i>サーバーモジュールプロダクトノート</i>』を参照してください。</p>
リモート管理	SP が動作する Oracle ILOM。
電源	モジュラーシステムシャーシは電源を備えています。
冷却装置	モジュラーシステムシャーシは環境制御機能を備えています。

関連情報

- ・ [9 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」](#)
- ・ [7 ページの「設置タスクの概要」](#)
- ・ [第3章](#)

フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント



番号	説明
1	ロケータ LED (白色、物理存在スイッチとしても機能)
2	取り外し可能 LED (青)
3	障害 LED (オレンジ色)

番号	説明
4	OK LED (緑色)
5	電源ボタン
6	リセットボタン: NMI (保守専用)
7	ドライブ取り外し可能 LED (青色)
8	ドライブ障害 LED (オレンジ色)
9	ドライブ OK LED (緑色)
10	取り外しレバー
11	RFID タグ (サーバーモジュールのシリアル番号を記載)
12	上部カバーのリリースボタン
13	UCP
14	ドライブスロット
15	シャーシ背面の電源コネクタ
16	シャーシ背面のデータ接続

LED の詳細については、『サーバーモジュールサービス』の LED の識別に関するセクションを参照してください。

関連情報

- [8 ページの「サーバーモジュールの概要」](#)
- [7 ページの「設置タスクの概要」](#)

サーバーの仕様の確認

サイト計画に関する情報は、Sun Blade 6000 モジュラーシステムのドキュメントに記載されています。『*Site Planning Guide for Sun Blade 6000 and Sun Blade 6048 Modular Systems*』を参照してください。

次に示すトピックは、サーバーモジュールの設置を計画するときに役立ちます。

- [11 ページの「物理仕様」](#)
- [11 ページの「電気仕様」](#)
- [12 ページの「環境仕様」](#)

関連情報

- [第5章](#)
- [7 ページの「設置タスクの概要」](#)
- [8 ページの「サーバーモジュールの概要」](#)

物理仕様

説明	アメリカ	メートル法
高さ	12.9 インチ	327 mm
幅	1.8 インチ	44 mm
奥行	20.1 インチ	511 mm
重量 ¹	17 ポンド	7.7 kg
保守のために最低限必要なスペース (前面)	36 インチ	91 cm

¹重量の仕様はモデルおよび内蔵オプションによって異なります。

関連情報

- [8 ページの「サーバーモジュールの概要」](#)

電気仕様

説明	値	注記
電圧	12 V	シャーシのバックプレーンから。

説明	値	注記
電圧 (予備)	3.3 V	シャーシのバックプレーンから。
最大動作電力	740 W	推定。

電力仕様については、次の場所にある電力計算機能を使用してください。

<http://www.oracle.com/us/products/servers-storage/sun-power-calculators>

また、『SPARC T5-1B サーバーモジュールプロダクトノート』でサーバーモジュールの電力使用量の構成に関する情報も参照してください。

関連情報

- [第6章](#)

環境仕様

このトピックでは、次の仕様について説明します。

- 温度、湿度、および高度
- 衝撃および振動

表3.1 温度、湿度、および高度の仕様

説明	動作時		非動作時		注記
	アメリカ	メートル法	アメリカ	メートル法	
温度 (最高)	0 - 2953 フィートで 41 - 95°F	900 m で 5 - 35°C	0 - 2953 フィートで -40 - 158°F	900 m で -40 - 70°C	2953 フィート (900 m) を超えると、 最高許容温度が 1000 フィートごとに 1.6°F (300 m ごとに 1°C) ずつ下が ります。
相対湿度	80.6°F で 10 - 90%	27°C で 10 - 90%	100.4°F で 最大 93%	38°C で最大 93%	最高湿球温度 (結露なし)。
高度	95°F で 10,000 フィート	40°C で 3048 m	最高 40,000 フィート	最大 12,000 m	

表3.2 衝撃および振動の仕様

説明	動作時	注記
衝撃	3 G、11ms	半正弦。
振動 (垂直)	0.15 G	5 - 500 HZ (Swept-Sine 法)。
振動 (水平)	0.10 G	

関連情報

- [第5章](#)

4

・・・第4章

設置の準備

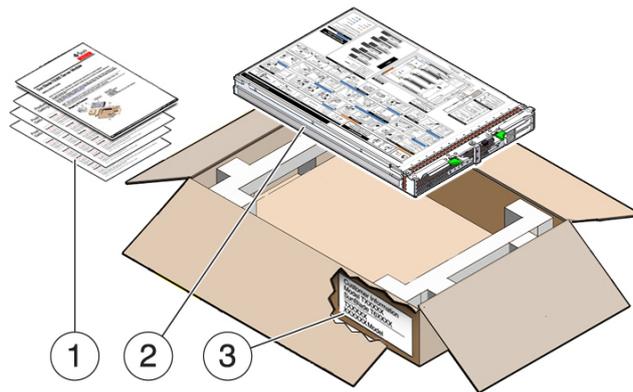
次に示すトピックは、サーバーモジュールの設置を準備するときに役立ちます。

- [13 ページの「目録」](#)
- [14 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- [14 ページの「ESD 防止対策」](#)
- [15 ページの「設置に必要な工具」](#)
- [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)
- [17 ページの「ドングルケーブル」](#)

関連情報

- [第5章](#)
- [7 ページの「設置タスクの概要」](#)

目録



番号	説明
1	スタートガイドを含む印刷物。
2	サーバーモジュール。
3	顧客情報シート (梱包箱の外側に添付)。サーバーモジュールの MAC アドレスと、インストール済みのハードウェアおよびソフトウェアに関する情報が記載されていますので、保管しておいてください。

関連情報

- [14 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- [14 ページの「ESD 防止対策」](#)
- [15 ページの「設置に必要な工具」](#)
- [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)
- [17 ページの「ドングルケーブル」](#)

取り扱い上の注意事項

- サーバーモジュールを運ぶときは両手を使ってください。
- フロントパネルの取り外しレバーを引き出すのは、タスク手順の実行において必要なときだけにしてください。

関連情報

- [11 ページの「物理仕様」](#)
- [13 ページの「目録」](#)
- [14 ページの「ESD 防止対策」](#)
- [15 ページの「設置に必要な工具」](#)
- [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)
- [17 ページの「ドングルケーブル」](#)

ESD 防止対策

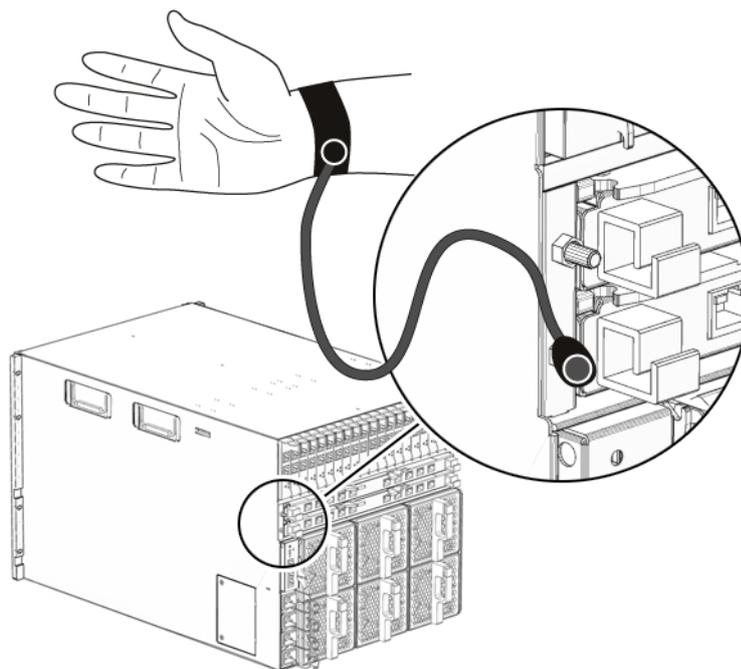
電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーモジュールの設置または保守作業時は、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷 (ESD) を防止します。



注意

電子コンポーネントが永続的に損傷する可能性がある静電気から保護するには、静電気防止用マットや静電気防止袋などの静電気防止面にコンポーネントを置いてください。サーバーコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電気防止用アースストラップを着用してください。

次の図に、静電気防止装置を接続できるモジュラーシステムシャーシの接地コネクタを示します。



関連情報

- ・ [13 ページの「目録」](#)
- ・ [14 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- ・ [15 ページの「設置に必要な工具」](#)
- ・ [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)
- ・ [17 ページの「ドングルケーブル」](#)

設置に必要な工具

サーバーモジュールを設置するときは、サーバーモジュールの内部にコンポーネントを設置する必要があるかどうかにかかわらず、次の工具があれば十分です。

- ・ 静電気防止用マット
- ・ 静電気防止用リストストラップ
- ・ UCP-3 または UCP-4 ドングルケーブル
- ・ 端末デバイスまたは端末エミュレータ
- ・ スタイラス (電源ボタンの押下用)

関連情報

- ・ [17 ページの「ドングルケーブル」](#)
- ・ [14 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- ・ [14 ページの「ESD 防止対策」](#)
- ・ [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)
- ・ [13 ページの「目録」](#)

設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する

初期設置中のサーバーモジュールと通信する方法はいくつかあります。使用する方法について計画してください。設置を行う前に、選択した方法に必要な装置、情報、およびアクセス権を用意します。

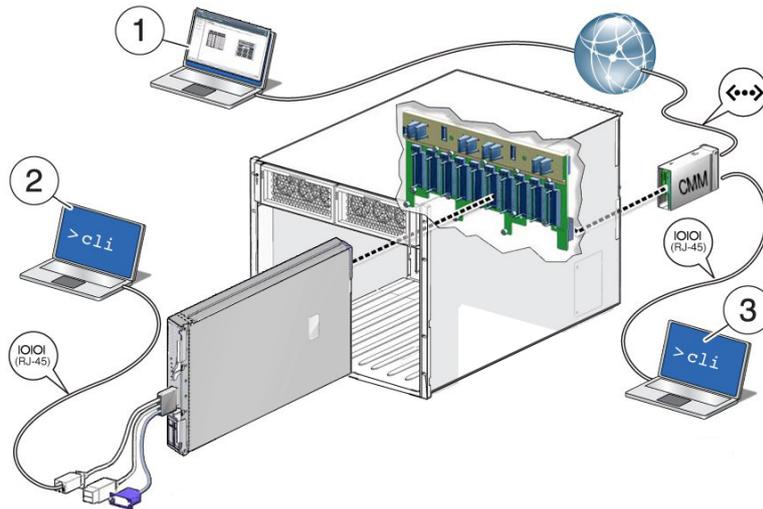


注記

IP および MAC アドレスの特定および構成の詳細については、『サーバーモジュール管理マニュアル』のネットワークアドレス情報の構成方法を参照してください。

- サーバーモジュール SP と通信するための接続方法をいずれか 1 つ選択します。

接続方法を下記の図に示し、その説明を表にまとめています。選択した方法に必要なケーブル、監視デバイス、アドレス、およびパスワードを用意します。



方法	接続の説明	接続の要件
1	<p>Ethernet</p> <p>接続元: CMM NET MGT ポート</p> <p>接続先: 使用中のネットワーク</p>	<ul style="list-style-type: none"> CMM の IP アドレスを知っている。 CMM Oracle ILOM ユーザーとパスワードアカウント情報を知っている。 <p>使用する Oracle ILOM インタフェースのタイプに基づいて、次の手順のいずれかを使用してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> Web インタフェース - 31 ページの「CMM SER MGT ポート (CLI) からホストに電源投入する」 CLI - 27 ページの「CMM (CLI) からホストに電源投入する」。
2	<p>シリアル</p> <p>接続元: サーバーモジュール SP UCP ポート</p> <p>接続先: 端末デバイス</p>	<ul style="list-style-type: none"> 端末デバイスとシリアルケーブル。 ドングルケーブル <p>CLI を使用して、サーバーモジュール SP 上の Oracle ILOM と直接通信します。29 ページの「フロントパネル (CLI) からホストに電源投入する」を参照してください。</p>
3	<p>シリアル</p>	<ul style="list-style-type: none"> 端末デバイスとシリアルケーブル

方法	接続の説明	接続の要件
	接続元: CMM SER MGT ポート	・ CMM Oracle ILOM ユーザーとパスワードアカウント情報を知っている。
	接続先: 端末デバイス	Oracle ILOM CLI を使用して、CMM 経由で通信します。 27 ページの「CMM (CLI) からホストに電源投入する」 を参照してください。

関連情報

- ・ [17 ページの「ドングルケーブル」](#)
- ・ [13 ページの「目録」](#)
- ・ [14 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- ・ [14 ページの「ESD 防止対策」](#)
- ・ [15 ページの「設置に必要な工具」](#)

ドングルケーブル

設定、テスト、または保守が目的の場合は、サーバーモジュール SP にケーブルを直接接続できません。そのためにはまず、サーバーモジュールのフロントパネルにある UCP にドングルケーブルを接続します。



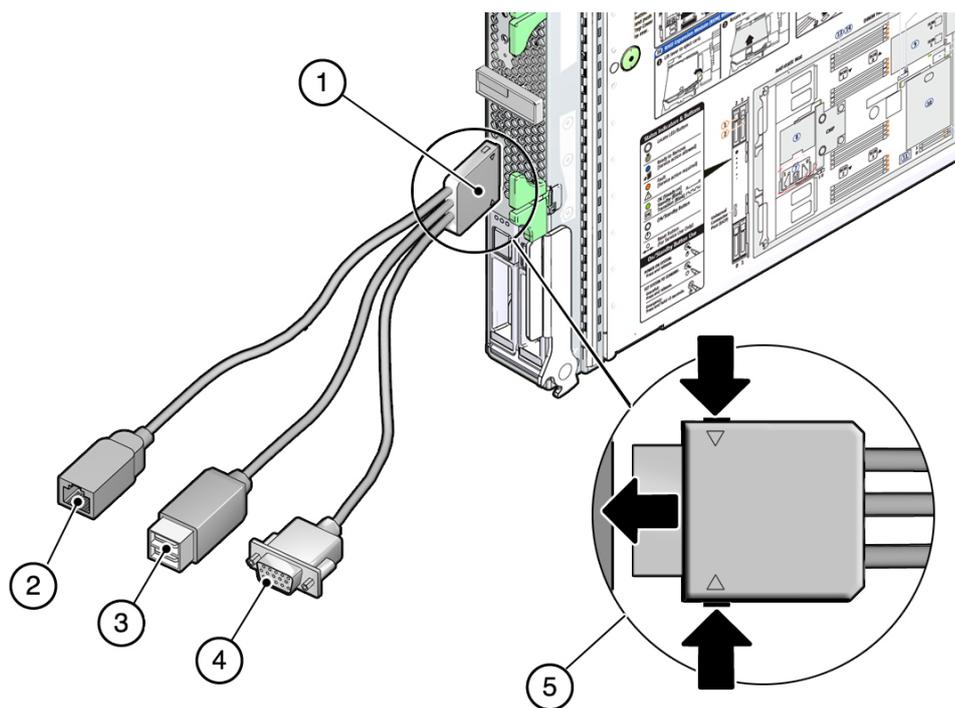
注意

使用しないときは、ドングルケーブルを外しておいてください。ドングルケーブルは、電磁適合性の遵守に関して評価されていないため、通常のシステム運用時には使用しないでください。

使用できるドングルケーブルには次の 2 種類があります。

- ・ **UCP-3** – サーバーモジュールに付属の 3 コネクタのドングルケーブル (推奨)。サーバーモジュール SP への接続には RJ-45 コネクタを使用します。
- ・ **UCP-4** – 4 コネクタのドングルケーブル (以前のバージョン)。サーバーモジュール SP への接続には DB-9 コネクタを使用する必要があります。RJ-45 コネクタはサポートされていません。RJ-45 接続が必要な場合は、オプションの DB-9/RJ-45 アダプタを DB-9 コネクタに接続します。

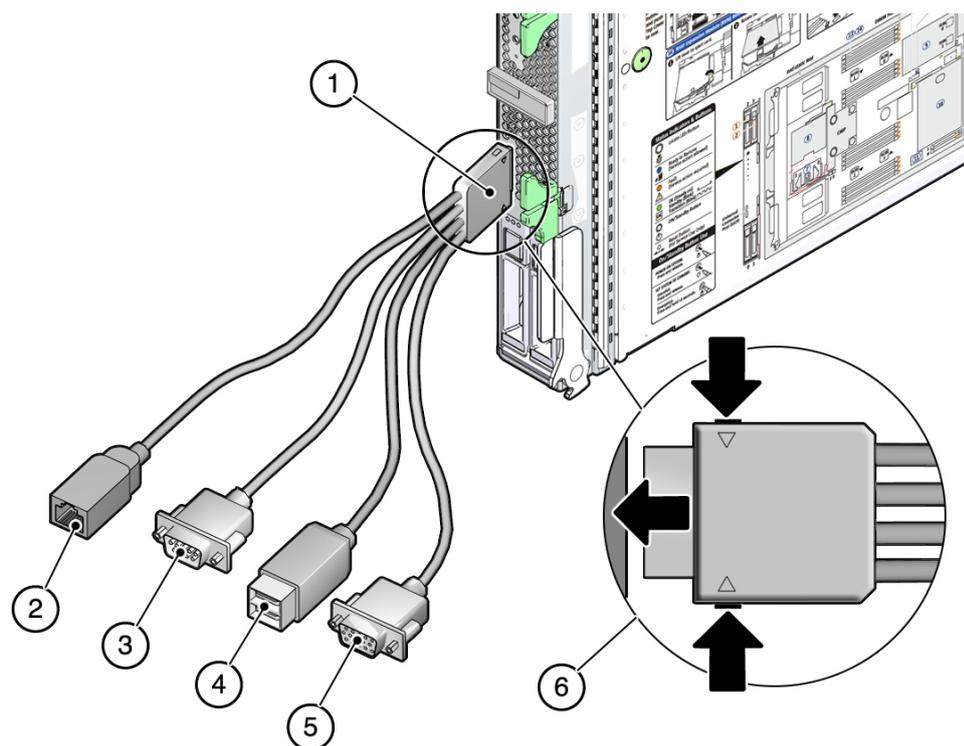
図4.1 UCP-3 ドングルケーブル (3 コネクタ)



図の凡例

- 1 サーバモジュール UCP に接続されたドングルコネクタ
- 2 RJ-45 シリアルコネクタ
- 3 USB 2.0 (2 コネクタ)
- 4 VGA 15 ピンコネクタ (メス)
- 5 挿入およびリリースボタン

図4.2 UCP-4 ドングルケーブル (4 コネクタ)



図の凡例

- 1 サーバモジュール UCP に接続されたドングルコネクタ
- 2 RJ-45 シリアルコネクタ (UCP-4 のものは使用しないでください)
- 3 DB-9 シリアルオスコネクタ (TTYA)
- 4 USB 2.0 (2 コネクタ)
- 5 VGA 15 ピンコネクタ (メス)
- 6 挿入およびリリースボタン

関連情報

- [13 ページの「目録」](#)
- [14 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- [14 ページの「ESD 防止対策」](#)
- [15 ページの「設置に必要な工具」](#)
- [16 ページの「設置中のサーバモジュールとの通信を計画する」](#)

5

・・・第5章

サーバーモジュールの設置

次に示すトピックでは、サーバーモジュールをモジュラーシステムに物理的に設置する方法を示します。

手順	説明	リンク
1.	モジュラーシステムのシャーシと設置するサーバーモジュールを準備します。	21 ページの「モジュラーシステムとサーバーモジュールを準備する」
2.	オプションのコンポーネントを設置します。	22 ページの「オプションのコンポーネントを設置する」
3.	サーバーモジュールをシャーシに挿入します。	22 ページの「サーバーモジュールをシャーシに挿入する」

関連情報

- ・ [第6章](#)
- ・ [7 ページの「設置タスクの概要」](#)

モジュラーシステムとサーバーモジュールを準備する

サーバーモジュールを設置する前に、Sun Blade 6000 モジュラーシステム (シャーシ) を設置および構成する必要があります。

1. モジュラーシステムが設置されていて、動作することを確認します。

次の条件を満たすことで、サーバーモジュールを確実に設置できます。

- a. モジュラーシステムを目的のラックに設置してから、サーバーモジュールを設置します。
- b. モジュラーシステムの CMM を介してサーバーモジュールを管理する計画の場合は、ネットワークで実行するように CMM を構成します。
- c. モジュラーシステムシャーシに電源が投入されていることを確認します。
- d. モジュラーシステムが Oracle の最新バージョンの CMM Oracle ILOM ファームウェアで実行していることを確認します。



注記

モジュラーシステムと CMM ILOM の準備については、『*Sun Blade 6000* モジュラーシステム設置ガイド』を参照してください。

2. サーバーモジュールを箱から取り出します。

フィルターパネルを取り外してから 60 秒以内にサーバーモジュールを挿入できるようにしてください。

3. オプションのコンポーネントを設置します。

[22 ページの「オプションのコンポーネントを設置する」](#)を参照してください。

関連情報

- [22 ページの「オプションのコンポーネントを設置する」](#)
- [22 ページの「サーバーモジュールをシャーシに挿入する」](#)

オプションのコンポーネントを設置する

サーバーモジュールの初期構成の一部としてご注文いただくオプションコンポーネントは、サーバーモジュールに設置された状態で出荷されます。このようなオプションコンポーネントは、サーバーモジュールのパッケージに添付の顧客情報シートに記載されています。

ただし、オプションコンポーネントを別個にご注文いただいた場合は、サーバーモジュールをモジュラーシステムシャーシに設置する前に、そのオプションコンポーネントをサーバーモジュールに設置する必要があります。

1. サーバーモジュールにオプションのコンポーネントを設置します。

オプションのコンポーネントを設置する場合は、『*サーバーモジュールサービスマニュアル*』とオプションのコンポーネントのドキュメントを参照してください。

2. サーバーモジュールを閉じます。
3. サーバーモジュールをシャーシに挿入します。

[22 ページの「サーバーモジュールをシャーシに挿入する」](#)を参照してください。

関連情報

- [21 ページの「モジュラーシステムとサーバーモジュールを準備する」](#)
- [22 ページの「オプションのコンポーネントを設置する」](#)

サーバーモジュールをシャーシに挿入する

モジュラーシステムに設置できるサーバーモジュールの合計数には制限があります。詳細については、『*SPARC T5-1B サーバーモジュールプロダクトノート*』、「サーバーモジュールの電力使用量の構成」を参照してください。

1. まだ実行していない場合は、モジュラーシステムとサーバーモジュールを準備します。

21 ページの「モジュラーシステムとサーバーモジュールを準備する」を参照してください。

2. まだ実行していない場合は、オプションのコンポーネントを設置します。

22 ページの「オプションのコンポーネントを設置する」を参照してください。

3. サーバーモジュールの背面コネクタから保護カバーを取り外します。
4. サーバーモジュールの物理的な設置が済んだら、サーバーモジュールとの通信の準備をします。

電源の入ったモジュラーシステムにサーバーモジュールを挿入すると、サーバーモジュールに即座に電源が供給され、SP によってメッセージが生成されます。メッセージを確認する場合は、16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」で説明されているいずれかの方法で接続する必要があります。

5. サーバーモジュールの設置先となるシャーシのスロットを確認します。

サーバーモジュールを挿入する直前まで、スロットのフィルターパネルは取り外さないでください。モジュラーシステム内の通気、熱、電磁妨害を正しい状態に保つため、すべてのスロットにサーバーモジュールまたはフィルターパネルが入った状態にすることをお勧めします。

6. 選択したシャーシスロットからフィルターパネルを取り外します。

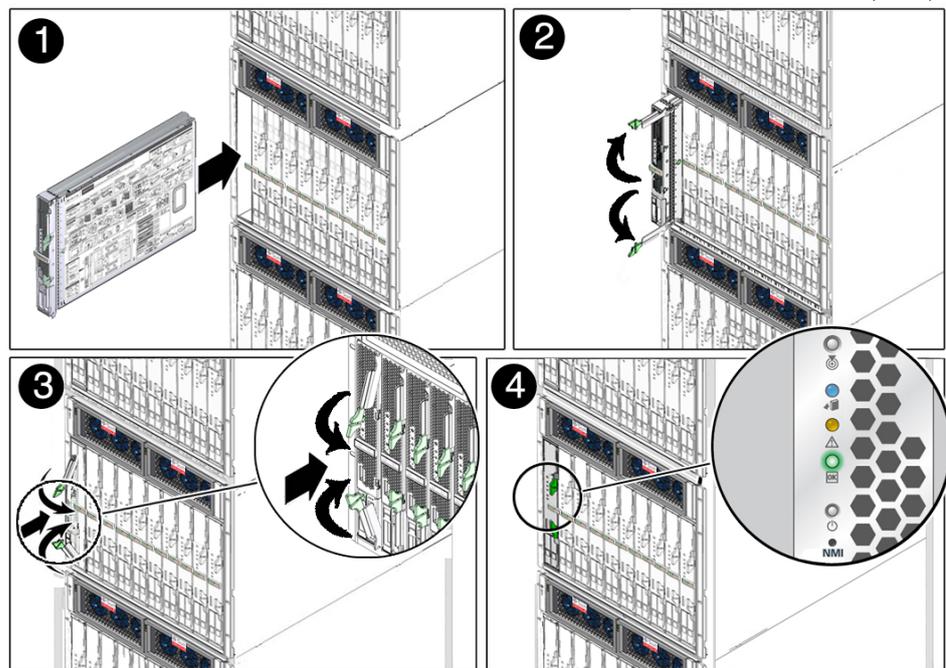
フィルターパネルの取り外しレバーを引き出して、シャーシからパネルをまっすぐに引き抜きます。



注意

フィルターパネルを取り外してから 60 秒以内にサーバーモジュールを挿入できるようにしてください。

7. 取り外しレバーが右側になるように、両手でサーバーモジュールを縦に配置します (図 1)。



8. サーバーモジュールを空のスロットに押し入れていき、モジュールの前面がシャーシの前面から約 0.5 インチ (1.5 cm) ほど手前になる位置で止めます (図 2)。
9. 取り外しレバーをつまんで開きます (図 2)。
10. サーバーモジュールをシャーシに押し込み、取り外しレバーを閉じます (図 2 および 3)。

11. サーバーモジュールに電源が入ったら、ステータスメッセージを確認します (図 4)。

サーバーモジュールが接続されると、スタンバイ電源が SP に供給されます。約 10 秒後に、フロントパネルの LED が 3 回点滅し、フロントパネルの緑色の OK LED が数分間点滅します。電源の入ったモジュラーシステムにサーバーモジュールが接続されるとすぐに、サーバーモジュール SP にメッセージが表示されます。[9 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」](#)を参照してください。

12. サーバーモジュールの電源を入れます。

[第6章](#)を参照してください。

関連情報

- [21 ページの「モジュラーシステムとサーバーモジュールを準備する」](#)
- [22 ページの「オプションのコンポーネントを設置する」](#)
- [9 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」](#)

サーバーモジュールへのはじめての電源投入

はじめて Oracle SPARC T5-1B サーバーモジュールに電源を投入するときに、プリインストールされている OS を構成するか、または新規 OS をインストールします。

説明	リンク
推奨される方法を使用して、はじめてサーバーモジュールに電源を投入します。	25 ページの「ホストへのはじめての電源投入」
プリインストールされている OS を構成するか、または新規 OS をインストールします。	32 ページの「OS のインストール」
オプションで、静的 IP アドレスを SP に割り当てます。	39 ページの「静的 IP アドレスを SP に割り当てる」

関連情報

- ・ [7 ページの「設置タスクの概要」](#)
- ・ [サーバー管理ガイド](#)

ホストへのはじめての電源投入

[16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)で選択した接続方法に応じて、この表の該当する行のタスクを実行します。

説明	リンク
方法 1 (Web インタフェース) – CMM と同じネットワーク上にあるブラウザから CMM Oracle ILOM Web インタフェースを使用して、ホストに電源投入します。	26 ページの「CMM (Web インタフェース) からホストに電源投入する」
方法 1 (CLI) – CMM と同じネットワーク上のシステムの端末ウィンドウから CMM Oracle ILOM CLI を使用して、ホストに電源投入します。	27 ページの「CMM (CLI) からホストに電源投入する」
方法 2 (CLI) – サーバーモジュールのフロントパネルに接続された端末デバイスから (ドングルケーブルを使用) サーバーモジュールの SP Oracle ILOM CLI を使用して、ホストに電源投入します。	29 ページの「フロントパネル (CLI) からホストに電源投入する」

説明	リンク
方法 3 (CLI) - CMM SER MGT ポートに接続された端末デバイスから CMM Oracle ILOM CLI を使用して、ホストに電源投入します。	31 ページの「CMM SER MGT ポート (CLI) からホストに電源投入する」

関連情報

- [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)

CMM (Web インタフェース) からホストに電源投入する

CMM NET MGT Ethernet ポートに接続されたネットワークから、CMM に接続します。この Ethernet 接続では Oracle ILOM CLI と Web インタフェースの両方がサポートされていますが、この手順では Web インタフェースを使用します。

この手順では、CMM Oracle ILOM バージョン 3.1 以上が実行されていることが前提となっています。



注記

デフォルトで、サーバーモジュールは、DHCP を使用して SP の IP アドレスを取得するように構成されています。

1. CMM の IP アドレスを確認します。
2. 使用中のネットワークに CMM が接続されていることを確認します。

ネットワーク接続は、CMM 上の NET MGT 0 ラベルの付いた RJ-45 コネクタを通して行われます。

3. モジュラーシステムと同じネットワーク上にあるブラウザから、CMM の IP アドレスを入力します。

たとえば、CMM の IP アドレスが 129.99.99.99 の場合は、ブラウザで **http://129.99.99.99** と入力します。

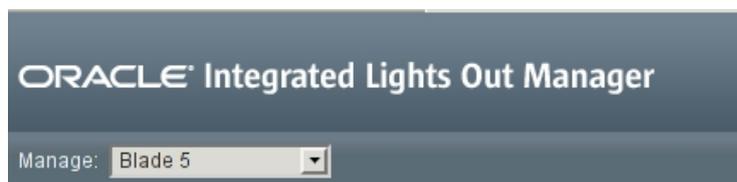
Oracle ILOM のログインウィンドウが表示されます。

4. 自分のユーザー名とパスワードを入力して CMM 上の Oracle ILOM にログインします。

root パスワードの出荷時のデフォルトは **changeme** ですが、使用している環境では変更されている可能性があります。

5. 左上隅で「Manage Chassis」を「Manage Blade n」に変更します。

ここで、n は、ブレードが取り付けられているスロットです。



「Blade Summary」ページが表示されます。

6. プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、残りのステップを実行しないでください。

代わりに、[36 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)に進んでください。

7. 次に、「Actions」ペインで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
8. アクションを確認します。

サーバーモジュールホストに電源投入され、POST が実行され、プリインストールされている OS からブートします。

9. 左のナビゲーションパネルで、「Remote Control」 > 「Redirection」をクリックします。
10. 「Use serial redirection」を選択し、「Launch Remote Console」をクリックします。

ホストがブートすると、シリアルコンソールにメッセージが表示されます。Oracle Solaris OS 構成情報を示すプロンプトが自動的に表示されます。

11. 目的どおりに Oracle Solaris OS を構成します。

[32 ページの「OS のインストール」](#)を参照してください。

関連情報

- [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)

CMM (CLI) からホストに電源投入する

RJ-45 NET MGT 0 Ethernet ポートを介して CMM に接続します。この Ethernet 接続では CMM SP との CLI と Web インタフェースの両方がサポートされていますが、この手順では CMM CLI の使用方法を示します。

1. CMM の IP アドレスを確認します。
2. 使用中のネットワークに CMM が接続されていることを確認します。

ネットワーク接続は、CMM 上の NET MGT 0 ラベルの付いた RJ-45 コネクタを通して行われます。

3. SSH クライアントを使用して CMM にログインします。

```
$ ssh root@cmm_ip_address
```

cmm_ip_address を CMM の IP アドレスに変更します。

4. プロンプトが表示されたら、CMM ILOM root アカウントのパスワードを入力します。

Oracle ILOM root パスワードの出荷時のデフォルトは changeme ですが、使用している環境では変更されている可能性があります。

```
Password: CMM_ILOM_password
Oracle(TM) Integrated Lights Out Manager
Version 3.x.x
...
```

```
Warning: password is set to factory default.  
->
```

これで、Oracle ILOM CMM の CLI にログインしました。



注記

Oracle ILOM CMM からログアウトする準備ができたなら、**exit** と入力します。

5. プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、残りのステップを実行しないでください。

代わりに、38 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)」に進んでください。

6. サーバーモジュールに移動します。

```
-> cd /Servers/Blades/Blade_n
```

ターゲットサーバーモジュールが取り付けられているモジュラーシステムのシャーシスロットを示す番号で n を置き換えます。

7. サーバーモジュールのホストに電源を投入します。

ターゲットサーバーモジュールが取り付けられているモジュラーシステムのシャーシスロットを示す番号で n を置き換えます。

```
-> start System  
Are you sure you want to start /Servers/Blades/Blade_n/System (y/  
n)? y  
Starting /System. . .
```

サーバーモジュールが初期化されます。

8. 通信をサーバーモジュールホストに切り替えます。

Oracle ILOM プロンプトが表示されたら、次のように入力します。

```
-> start HOST/console  
Are you sure you want to start /Servers/Blades/Blade_5/HOST/console  
(y/n)? y  
Serial console started. To stop, type #.  
...
```

サーバーモジュールで POST を完了するのに、数分かかることがあります。Oracle Solaris OS がインストールされているブートデバイスにローカルからアクセスできる場合は、サーバーモジュールがブートします。ローカルからアクセスできない場合、サーバーモジュールは **boot net** コマンドを使用して、ネットワーク上のブートデバイスを検索します。

これで、サーバーモジュールのホストに接続しました。



注記

サーバーの初期化がバックグラウンドで続行されている間に、その他の Oracle ILOM コマンドを実行できます。SP Oracle ILOM に戻るには、次を入力します: **#.** (シャープとピリオド)。使用可能な Oracle ILOM コマンドに関する情報を表示するには、**help** を入力します。初期化に戻るには、**start /HOST/console** を入力します。

9. サーバーモジュールハードウェアの設置はこれで完了です。

この段階まで来たら、目的どおりに Oracle Solaris OS を構成できます。[32 ページの「OS のインストール」](#)を参照してください。

関連情報

- [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)

フロントパネル (CLI) からホストに電源投入する

サーバーモジュール SP に直接アクセスするには、サーバーモジュール前面の UCP にドングルケーブルを接続します。



注意

ドングルケーブルは、設定、テスト、または保守のために使用し、使用しないときは取り外すようにしてください。ドングルケーブルは、電磁適合性の遵守に関して評価されていないため、通常の運用時には使用しないでください。[17 ページの「ドングルケーブル」](#)を参照してください。

1. 端末デバイスまたは端末エミュレーションソフトウェアを次の設定で構成します。

- 8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)
- 9600 ボー (デフォルト。標準速度は最大 57600 まで設定できます)
- ハードウェアフロー制御 (CTS/RTS) は無効

2. ドングルケーブルをサーバーモジュールのフロントパネルにある UCP コネクタに接続します。

可能であれば、4 コネクタの UCP-4 ではなく、3 コネクタの UCP-3 ドングルケーブルを使用してください。詳細は、[17 ページの「ドングルケーブル」](#)を参照してください。

3. 端末または端末エミュレータをドングルケーブルに接続します。

- UCP-3 ドングルケーブルの場合、RJ-45 コネクタを使用します。
- UCP-4 ドングルケーブルの場合、DB-9 シリアルコネクタ (TTYA) を使用します。UCP-4 に RJ-45 で接続する必要がある場合は、DB-9 コネクタに接続する DB-9/RJ-45 アダプタを使用してください。

端末または端末エミュレータに Oracle ILOM ログインプロンプトが表示されます。

4. プロンプトが表示されたら、ユーザー名とパスワードを入力します。

デフォルトのユーザーは **root** です。デフォルトのパスワードは **changeme** です。

これで、サーバーモジュール SP 上の Oracle ILOM にログインしました。

5. プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、残りのステップを実行しないでください。

代わりに、[38 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)に進んでください。

6. ホストの電源を投入します。

```
-> start /System
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
Starting /System. . .
```

サーバーモジュールが初期化されます。

7. 通信をサーバーモジュールホストに切り替えます。

Oracle ILOM プロンプトが表示されたら、次のように入力します。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started. To stop, type #.
```

サーバーモジュールで POST を完了するのに、数分かかることがあります。Oracle Solaris OS がインストールされているブートデバイスにローカルからアクセスできる場合は、サーバーモジュールがブートします。ローカルからアクセスできない場合、サーバーモジュールは **boot net** コマンドを使用して、ネットワーク上のブートデバイスを検索します。

これで、サーバーモジュールのホストに接続しました。



注記

サーバーの初期化がバックグラウンドで続行されている間に、その他の Oracle ILOM コマンドを実行できます。SP Oracle ILOM に戻るには、次を入力します: **#.** (シャープとピリオド)。使用可能な Oracle ILOM コマンドに関する情報を表示するには、**help** を入力します。初期化に戻るには、**start /HOST/console** を入力します。

-
8. サーバーモジュールハードウェアの設置はこれで完了です。

この段階まで来たら、目的どおりにサーバーモジュールを構成できます。[33 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)
- [17 ページの「ドングルケーブル」](#)

CMM SER MGT ポート (CLI) からホストに電源投入する

サーバーモジュール SP にアクセスするには、まず、シャーシ上の RJ-45 シリアルポートに接続された端末または端末エミュレータを使用して、Oracle CMM ILOM にアクセスします。これにより、Oracle ILOM CMM の CLI からサーバーモジュール SP に接続できます。

1. シャーシに接続する端末、ノートパソコン、または端末サーバーが動作していることを確認します。
2. 端末デバイスまたは端末エミュレーションソフトウェアを次の設定で構成します。
 - 8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)
 - 9600 ボー (デフォルト。標準速度は最大 57600 まで設定できます)
 - ハードウェアフロー制御 (CTS/RTS) は無効
3. CMM のシリアルポートから端末デバイスにシリアルケーブルを接続します。

CMM シリアルポートの位置については、モジュラーシステムのドキュメントを参照してください。

シリアルポートには次のピン配列を備えたケーブルが必要です。

ピン	信号の説明
1	送信要求 (RTS)
2	データ端末レディー (DTR)
3	送信データ (TXD)
4	アース
5	アース
6	受信データ (RXD)
7	データキャリア検出 (DCD)
8	送信可 (CTS)

4. 端末デバイスで Enter キーを押します。

端末デバイスと CMM の間の接続が確立されます。

シリアルポートに接続したあとでサーバーモジュールの電源を投入した場合は、ブートメッセージが表示されます。Oracle ILOM CMM ソフトウェアから、次のログインプロンプトが表示されます。

```
ORACLECMMnnnnnnnnnn login:
```

プロンプトの先頭文字列はデフォルトのホスト名です。ホスト名は接頭辞 **ORACLECMM** のあとに Oracle ILOM CMM の MAC アドレスが続きます。各 CMM と SP の MAC アドレスは一意です。

5. 自分のユーザー名とパスワードを入力して CMM 上の Oracle ILOM にログインします。

Oracle ILOM root パスワードの出荷時のデフォルトは **changeme** ですが、使用している環境では変更されている可能性があります。

これで、Oracle ILOM CMM の Web インタフェースにログインしました。

ログインに成功すると、Oracle ILOM CMM に次のデフォルトのコマンドプロンプトが表示されます。

```
->
```

6. サーバーモジュールに移動します。

```
-> cd /Servers/Blades/Blade_n
```

ターゲットサーバーモジュールが取り付けられているモジュラーシステムのシャーシスロットを示す番号で *n* を置き換えます。

7. サーバーモジュールのホストに電源を投入します。

ターゲットサーバーモジュールが取り付けられているモジュラーシステムのシャーシスロットを示す番号で *n* を置き換えます。

```
-> start System
Are you sure you want to start /Servers/Blades/Blade_n/System (y/n)? y
Starting /System. . .
```

サーバーモジュールが初期化されます。

8. 通信をサーバーモジュールホストに切り替えます。

Oracle ILOM プロンプトが表示されたら、次のように入力します。

```
-> start HOST/console
Are you sure you want to start /Servers/Blades/Blade_5/HOST/console
(y/n)? y
Serial console started. To stop, type #.
...
```

サーバーモジュールで POST を完了するのに、数分かかることがあります。Oracle Solaris OS がインストールされているブートデバイスにローカルからアクセスできる場合は、サーバーモジュールがブートします。ローカルからアクセスできない場合、サーバーモジュールは **boot net** コマンドを使用して、ネットワーク上のブートデバイスを検索します。

これで、サーバーモジュールのホストに接続しました。

9. サーバーモジュールハードウェアの設置はこれで完了です。

この段階まで来たら、目的どおりに Oracle Solaris OS を構成できます。[32 ページの「OS のインストール」](#)を参照してください。

関連情報

- [16 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)

OS のインストール

状況に適したタスクセットを実行してください。

説明	リンク
プリインストールされている OS を構成します。	33 ページの「プリインストールされている OS を構成する」 33 ページの「Oracle Solaris の構成パラメータ」
新規 OS をインストールします (Oracle ILOM Web インタフェース)。	36 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)」
新規 OS をインストールします (Oracle ILOM CLI)。	38 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)」

関連情報

- [25 ページの「ホストへのはじめての電源投入」](#)

プリインストールされている OS を構成する

次の手順は、サーバーモジュールのスロット 0 のドライブにプリインストールされた Oracle Solaris OS ソフトウェアを使用していることが前提となります。Oracle Solaris OS を別の方法でインストールする場合は、Oracle Solaris OS のインストールを完了してから、次の手順を再開してください。

- Oracle Solaris インストールプロセスの構成に関する質問に答えます。
[33 ページの「Oracle Solaris の構成パラメータ」](#)で構成の選択肢を参照してください。

関連情報

- [33 ページの「Oracle Solaris の構成パラメータ」](#)
- [39 ページの「静的 IP アドレスを SP に割り当てる」](#)

Oracle Solaris の構成パラメータ

サーバーモジュール上で Oracle Solaris OS を構成する場合は、次のパラメータを指定するように求められます。自分のインストール環境に当てはまる情報だけを収集する必要があります。



注記

構成パラメータは、インストールする Oracle OS のリリースによって少し異なります。

インストール情報	説明または例	ユーザーの値 (* はデフォルト値を示す)
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムはネットワークに接続されていますか。	<ul style="list-style-type: none"> • ネットワークに接続されている • ネットワークに接続されていない*

インストール情報	説明または例	ユーザーの値 (* はデフォルト値を示す)
DHCP	ネットワークインタフェースの構成に、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用できますか。	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*
DHCP を使用しない場合は、ネットワークアドレスを入力します。	IP アドレス システムの IP アドレスを記入します。 例: 192.168.100.1 サブネット システムはサブネットの一部ですか。 「はい」の場合、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.255.0	255.255.0.0*
	IPv6 このマシンで IPv6 を有効にしますか。	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティーを構成しますか。 「はい」の場合、この情報を収集します。 デフォルトレルム: 管理サーバー: 第 1 KDC: (オプション) 追加の KDC:	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*
ネームサービス	ネームサービス 該当する場合、このシステムではどのネームサービスを使用しますか。	<ul style="list-style-type: none"> • NIS+ • NIS • DNS • LDAP • なし*
	ドメイン名 システムが含まれているドメインの名前を入力します。	DNS または NIS
	NIS+ および NIS NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定しますか、それともインストールプログラムに検索させますか。	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 検索する* NIS を選択した場合: <ul style="list-style-type: none"> • NIS ドメインを指定する • NIS サーバーを指定するか検索するかを指定する
	DNS DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つの IP アドレスを入力する必要があり、最大で 3 つのアドレスを入力できます。 また、DNS クエリーを行う際に検索する DNS ドメインのリストを入力することもできます。 検索ドメイン: 検索ドメイン:	

インストール情報	説明または例	ユーザーの値 (* はデフォルト値を示す)
	検索ドメイン:	
LDAP	<p>LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関するこの情報を入力します。</p> <p>プロファイル名:</p> <p>プロファイルサーバー:</p> <p>LDAP プロファイルにプロキシ資格レベルを指定する場合には、次の情報を収集します。</p> <p>プロキシバインド識別名:</p> <p>プロキシバインドパスワード:</p>	
デフォルトルート	<p>デフォルトのルート IP アドレスを指定しますか、それとも OS インストールプログラムに検索させますか。</p> <p>デフォルトルートは、2 つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。</p> <p>次の選択肢があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのレポート時に、指定した IP アドレスがデフォルトルートになります。 OS インストールプログラムに IP アドレスを検出させることができます。ただし、システムは、ルーター検出用の ICMP を使用して自分の場所を通知するルーターが含まれるサブネット上にある必要があります。CLI を使用する場合は、システムのブート時にソフトウェアによって IP アドレスが検出されます。 ルーターを使用していないか、現時点ではソフトウェアに IP アドレスを検出させたくない場合には、「なし」を選択することもできます。ソフトウェアは、レポート時に IP アドレスを自動的に検出しようとします。 	<ul style="list-style-type: none"> 指定する 検出する なし*
タイムゾーン	デフォルトのタイムゾーンを指定する方法を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> 地理的地域* GMT からのオフセット タイムゾーンファイル
root パスワード	システムの root パスワードを選択します。	

関連情報

- [33 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [39 ページの「静的 IP アドレスを SP に割り当てる」](#)

新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)

プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、この手順を使用して、サーバーモジュールがプリインストールされている OS をブートしないようにします。

1. インストール方法に応じて、適切なブートメディアを準備します。

OS をインストールする方法は数多くあります。たとえば、DVD メディアやネットワーク上の別のサーバーから OS をブートし、インストールできます。

インストール方法の詳細については、Oracle Solaris ドキュメントの次のセクションを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

2. まだ実行していない場合は、次のタスクを実行して、サーバーモジュール上の Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスします。
 - a. モジュラーシステムと同じネットワーク上にあるブラウザから、CMM の IP アドレスを入力します。
 - b. 自分のユーザー名とパスワードを入力して CMM 上の Oracle ILOM にログインします。
 - c. 左上隅で「Manage Chassis」を「Manage Blade_n」に変更します。ここで、n は、サーバーモジュールが取り付けられているスロットです。



注記

これらのタスクについては、26 ページの「CMM (Web インタフェース) からホストに電源投入する」で説明されています。

3. Oracle ILOM Web インタフェースの左のナビゲーションペインで、「Host Management」> 「Host Boot Mode」を選択します。

「Host Boot Mode」ページが表示されます。

4. 「Host Boot Mode Settings」に次の変更を適用します。

- a. 「**State**」には、「**Reset NVRAM**」を選択します。

この設定では、スクリプトの設定に基づいて 1 回の NVRAM (OBP) の変更が適用され、次回のホストリセット時に NVRAM がデフォルト設定にリセットされます。

- b. 「**Script**」には、「**setenv auto-boot? false**」を入力します。

この設定では、プリインストールされている OS を自動的にブートする代わりに、**ok** プロンプトでホストが停止するように構成されます。

- c. 「**Save**」をクリックします。



注記

次の手順の実行時間は 10 分です。10 分後に、自動的に通常の状態に戻ります。

5. 左のナビゲーションパネルで、「Host Management」>「Power Control」をクリックします。
6. プルダウンメニューから「Reset」を選択し、「Save」をクリックします。
7. 左のナビゲーションパネルで、「Remote Control」>「Redirection」をクリックします。
8. 「Use Serial Redirection」を選択し、「Launch Remote Console」をクリックします。

ホストがリセットされると、シリアルコンソールにメッセージが表示されます。リセットアクティビティが完了するまで数分かかります。**OK** プロンプトが表示されたら、次の手順に進みます。

9. OK プロンプトで、インストール方法に適したブートメディアからブートします。

詳細については、目的のリリースおよびインストール方法に対応した Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

有効なブートコマンドの一覧を表示するには、次のように入力します。

```
{0} ok help File
boot <specifier> ( -- )    boot kernel ( default ) or other file
Examples:
  boot                      - boot kernel from default device.
                           Factory default is to boot
                           from DISK if present, otherwise from
NET.
  boot net                  - boot kernel from network
  boot cdrom                - boot kernel from CD-ROM
  boot disk1:h              - boot from disk1 partition h
  boot tape                 - boot default file from tape
  boot disk myunix -as      - boot myunix from disk with flags "-as"
dload <filename> ( addr -- )  debug load of file over network at
address
Examples:
  4000 dload /export/root/foo/test
  ?go                       - if executable program, execute it
                           or if Forth program, compile it
```

関連情報

- [33 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [38 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [39 ページの「静的 IP アドレスを SP に割り当てる」](#)

新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)

プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、この手順を使用して、サーバーモジュールがプリインストールされている OS からブートされないようにします。

1. インストール方法に応じて、適切なブートメディアを準備します。

OS をインストールする方法は数多くあります。たとえば、DVD メディアやネットワーク上の別のサーバーから OS をブートおよびインストールできます。

インストール方法の詳細については、Oracle Solaris ドキュメントの次のセクションを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

2. Oracle ILOM から、OBP **auto-boot** パラメータを **false** に設定します。

```
-> set /HOST/bootmode script="setenv auto-boot? false"
```

この設定では、プリインストールされている OS からサーバーモジュールがブートしなくなります。ホストの電源がリセットされていない場合に、**bootmode** を使用すると、変更は 1 回のブートにのみ適用され、10 分で期限切れになります。

3. OS のインストールを開始する準備ができたなら、ホストをリセットします。

```
-> reset /System
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing reset on /System
```

4. 通信をサーバーモジュールホストに切り替えます。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started. To stop, type #.
```

サーバーモジュールで POST を完了するまでに、数分かかることがあります。その後、**ok** プロンプトが表示されます。

5. インストール方法に適したブートメディアからブートします。

詳細については、目的のリリースおよびインストール方法に対応した Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Solaris インストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

有効なブートコマンドの一覧を表示するには、次のように入力します。

```
{0} ok help File
boot <specifier> ( -- )    boot kernel ( default ) or other file
  Examples:
    boot                    - boot kernel from default device.
                           Factory default is to boot
                           from DISK if present, otherwise from
NET.
    boot net                - boot kernel from network
    boot cdrom              - boot kernel from CD-ROM
    boot disk1:h            - boot from disk1 partition h
    boot tape               - boot default file from tape
    boot disk myunix -as    - boot myunix from disk with flags "-as"
dload <filename> ( addr -- )  debug load of file over network at
address
  Examples:
    4000 dload /export/root/foo/test
    ?go                    - if executable program, execute it
                           or if Forth program, compile it
```

関連情報

- [33 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [36 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [39 ページの「静的 IP アドレスを SP に割り当てる」](#)

静的 IP アドレスを SP に割り当てる

NET MGT ポート (ドングルの RJ-45 コネクタ) から SP に接続する予定の場合は、SP に有効な IP アドレスが割り当てられている必要があります。

デフォルトでは、サーバーモジュールは、ネットワークの DHCP サービスを使用して IP アドレスを取得するように構成されています。サーバーモジュールが接続されているネットワークが IP アドレス指定を行う DHCP をサポートしていない場合は、次の手順に従います。

DHCP をサポートするようにサーバーモジュールを構成するには、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。

1. 静的 IP アドレスを受け入れるように SP を設定します。

```
-> set /SP/network pendingipdiscovery=static
Set 'pendingipdiscovery' to 'static'
```

2. SP の IP アドレスを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipaddress=service-processor-IPaddr
Set 'pendingipaddress' to 'service-processor-IPaddr'
```

3. SP ゲートウェイの IP アドレスを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipgateway=gateway-IPaddr
Set 'pendingipgateway' to 'gateway-IPaddr'
```

4. SP のネットマスクを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipnetmask=255.255.255.0
Set 'pendingipnetmask' to '255.255.255.0'
```

この例では、**255.255.255.0** を使用してネットマスクを設定します。使用しているネットワーク環境のサブネットでは、異なるネットマスクが必要になる場合があります。使用している環境にもっとも適したネットマスク番号を使用してください。

5. 保留中のパラメータが適切に設定されたことを確認します。

```
-> show /SP/network
/SP/network
Targets:
Properties:
commitpending = (Cannot show property)
dhcp_server_ip = xxx.xxx.xxx.xxx
ipaddress = xxx.xxx.xxx.xxx
ipdiscovery = dhcp
ipgateway = xxx.xxx.xxx.xxx
ipnetmask = 255.255.255.0
macaddress = 00:21:28:C1:6E:C5
managementport = /System/MB/SP/NETMGMT
outofbandmacaddress = 00:21:28:C1:6E:C5
pendingipaddress = service-processor-IPaddr
pendingipdiscovery = static
pendingipgateway = gateway-IPaddr
pendingipnetmask = 255.255.255.0
pendingmanagementport = /System/MB/SP/NETMGMT
sidebandmacaddress = 00:21:28:C1:6E:C4
state = enabled
```

6. SP のネットワークパラメータに対する変更を確定します。

```
-> set /SP/network commitpending=true
Set 'commitpending' to 'true'
```



注記

show /SP/network コマンドをもう一度実行し、パラメータが更新されたことを確認できます。

7. Oracle Solaris OS を構成するときの静的 IP アドレスを設定します。

[33 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [33 ページの「プリインストールされている OS を構成する」](#)
- [33 ページの「Oracle Solaris の構成パラメータ」](#)

用語集

A

ANSI SIS	American National Standards Institute Status Indicator Standard。
ASF	警告標準フォーマット (Netra 製品のみ)。
AWG	米国ワイヤゲージ規格。

B

ブレード	サーバーモジュールおよびストレージモジュールの一般名称。 サーバーモジュール および ストレージモジュール を参照してください。
ブレードサーバー	サーバーモジュール。 サーバーモジュール を参照してください。
BMC	Baseboard Management Controller。
BOB	Memory Buffer On Board (オンボードのメモリーバッファー)。

C

シャーシ	サーバーの場合は、サーバーのエンクロージャーを指します。サーバーモジュールの場合は、モジュラーシステムのエンクロージャーを指します。
CMA	ケーブル管理部品。
CMM	シャーシ監視モジュール (サーバーモジュールのみ)。CMM はサーバーモジュールが搭載されたモジュールシステム内のサービスプロセッサです。Oracle ILOM は CMM 上で動作して、モジュラーシステムシャーシ内のコンポーネントの電源管理 (LOM) を提供します。 モジュラーシステム および Oracle ILOM を参照してください。
CMP	チップマルチプロセッサ。

D

DHCP	動的ホスト構成プロトコル。
ディスクモジュール、またはディスクブレード	ストレージモジュールの別名。 ストレージモジュール を参照してください。
DTE	Data Terminal Equipment (データ端末装置)。

E

EIA	Electronics Industries Alliance (米国電子工業会)。
ESD	静電放電。

F

FEM ファブリック拡張モジュール (サーバーモジュールのみ)。FEM により、サーバーモジュールは特定の NEM によって提供される 10GbE 接続を使用できます。[NEM](#) を参照してください。

FRU 現場交換可能ユニット。

H

HBA ホストバスアダプタ。

ホスト Oracle Solaris OS およびその他のアプリケーションを実行する、CPU およびその他のハードウェアを備えたサーバーまたはサーバーモジュールの部分。**ホス**という用語は、プライマリコンピュータと SP を区別するために使用されます。[SP](#) を参照してください。

ホットプラグ可能 電力が供給された状態で交換可能なコンポーネントを表しますが、コンポーネントを取り外す準備が必要です。

ホットスワップ可能 電力が供給された状態で交換可能なコンポーネントを表し、準備の必要はありません。

I

ID PROM サーバーまたはサーバーモジュールのシステム情報が格納されたチップ。

IP Internet Protocol (インターネットプロトコル)。

K

KVM キーボード、ビデオ、マウス。複数のコンピュータで 1 つのキーボード、1 つのディスプレイ、1 つのマウスを共有するには、スイッチの使い方を参照してください。

L

LwA 音響パワーレベル。

M

MAC マシンアクセスコード。

MAC アドレス メディアアクセス制御アドレス。

モジュラーシステム サーバーモジュール、ストレージモジュール、NEM、および PCI EM を収納するラックマウント可能シャーシ (サーバーモジュールのみ)。モジュラーシステムは、その CMM を介して Oracle ILOM を提供します。

MSGID メッセージ識別子。

N

名前空間 最上位の Oracle ILOM ターゲット。

NEBS	ネットワーク機器構築システム (Netra 製品のみ)。
NEM	ネットワークエクスプレスモジュール (サーバーモジュールのみ)。NEM はストレージモジュールへの Ethernet 接続および SAS 接続を提供します。
NET MGT	ネットワーク管理ポート。サーバー SP、サーバーモジュール SP、および CMM 上の Ethernet ポート。
NIC	Network Interface Card/Controller (ネットワークインタフェースカードまたはネットワークインタフェースコントローラ)
NMI	マスク不可能割り込み。
O	
OBP	OpenBoot PROM。OBP は、OpenBoot との関係を示すためにファイル名およびメッセージで使用されることがあります。
Oracle ILOM	Oracle Integrated Lights Out Manager。Oracle ILOM ファームウェアは、各種 Oracle システムにプリインストールされています。Oracle ILOM を使用すると、ホストシステムの状態に関係なく、Oracle サーバーをリモートから管理できます。
Oracle ILOM CMM	CMM で動作する Oracle ILOM (サーバーモジュールのみ)。 Oracle ILOM を参照してください。
Oracle Solaris OS	Oracle Solaris オペレーティングシステム。
P	
PCI	Peripheral Component Interconnect。
PEM	PCIe Express Module (サーバーモジュールのみ)。PCI Express の業界標準フォームファクタに基づくモジュラーコンポーネントで、ギガビット Ethernet やファイバチャネルなどの I/O 機能を提供します。
POST	電源投入時自己診断。
PROM	プログラム可能な読み取り専用メモリー。
PSH	予測的自己修復。
R	
REM	RAID 拡張モジュール (サーバーモジュールのみ)。HBA とも呼びます。 HBA を参照してください。ドライブへの RAID ボリュームの作成をサポートします。
S	
SAS	Serial Attached SCSI。
SCC	System Configuration Chip (システム構成チップ)。
SER MGT	シリアル管理ポート。サーバー SP、サーバーモジュール SP、および CMM 上のシリアルポート。

サーバーモジュール	モジュラーシステムで主要な演算リソース (CPU とメモリー) を提供するモジュラーコンポーネント。サーバーモジュールには、オンボードストレージおよび FEM を保持するコネクタがある場合もあります。
SP	サービスプロセッサ。サーバーまたはサーバーモジュールの SP は、専用の OS を搭載したカードです。SP は Oracle ILOM コマンドを処理し、ホストの電源管理 (LOM) を提供します。 ホスト を参照してください。
SSD	Solid-State Drive (半導体ドライブ)。
SSH	Secure Shell。
ストレージモジュール	サーバーモジュールに演算ストレージを提供するモジュラーコンポーネント。
T	
TIA	Telecommunications Industry Association (米国通信工業会) (Netra 製品のみ)。
Tma	最大周囲温度。
U	
UCP	Universal Connector Port (ユニバーサルコネクタポート)。
UI	ユーザーインターフェース。
UL	Underwriters Laboratory Inc.
U.S. NEC	United States National Electrical Code (米国電気工事基準)。
UTC	協定世界時。
UUID	Universal Unique Identifier (汎用一意識別子)。
W	
WWN	World Wide Name。SAS ターゲットを一意に特定する番号。

索引

あ

アーキテクチャー, プロセッサ, 8
インストール
 Oracle Solaris, 32
インストール用の CLI, 27
奥行, 11
オプションコンポーネント, 22
音響仕様, 12
温度仕様, 12

か

概要, 設置タスク, 7
環境仕様, 12
関連ドキュメント, 5
機能, サーバモジュール, 8
グラフィック, オンボード, 8
ケーブル, ドングル, 16, 17, 29
高度仕様, 12, 12
顧客情報シート, 13
コネクタカバー, 22
コンポーネント
 オプション, 22
 フロントパネルと背面パネル (設置), 9

さ

サーバへの接続
 CMM NET MGT ポート (CLI), 27
 CMM NET MGT ポート (Web インタフェース), 26
 CMM SER MGT ポート (CLI), 31
 UCP コネクタ, 29
サーバモジュール
 OS の構成, 33
 概要, 7
 起動, 31
 機能, 8
 シャーシへの挿入, 22
 設置, 21
 電源投入, 25
サーバモジュールとの通信, 16
サーバモジュールの概要, 7
サーバモジュールの起動, 31
サーバモジュールへの電源投入, 25
システムファームウェア, 8
湿度仕様, 12
シャーシ
 サーバモジュールの挿入, 22
 準備, 21
重量, 11
出荷キットの目録, 13
出荷キット目録, 13
仕様
 音響, 12

温度, 12
環境, 12
高度, 12, 12
湿度, 12
振動, 12
電圧, 11
電気, 11
電力, 11
物理, 11

シリアルケーブルのピン配列, 31
シリアルポート接続, 16, 17
シリアルリダイレクト, 26
振動仕様, 12
寸法, 11
静的 IP アドレス, 39
静電気防止用マットとリストストラップ (設置), 15
設置
 計画, 11, 13
 サーバモジュール, 21
 シャーシの準備, 21
 タスクの概要, 7
 必要な工具, 15
設置に必要な工具, 15
設置の計画, 11, 13
接続方法, 16

た

高さ, 11
タスクの概要, 設置, 7
注意事項
 取り扱い, 14
電気仕様, 11
電源コネクタ, 9
電源ボタン, 9
電力計算機能, 11
データコネクタ (設置), 9
ドキュメント, 関連, 5
取り扱い上の注意事項, 14
取り外しレバー, 22
ドングルケーブル, 16, 17, 29

は

背面パネルのコンポーネント, 9
幅, 11
フィルターパネル, 22
物理仕様, 11
プロセッサアーキテクチャー, 8
フロントパネルのコンポーネント, 9
防止対策
 ESD, 14

ま

メモリー
 仕様, 8
モジュラーシステムシャーシの準備, 21

ら

- リセットボタン, 9
- リモートコンソール, 26
- 冷却, 8

アルファベット

- CMM SER MGT ポート, 16
 - インストールで使用, 31
- DHCP サーバー, IP アドレスの表示, 39
- DIMM
 - タイプ, 8
- ESD 防止対策, 14
- Ethernet ポート, 8
- IP アドレス
 - CMM, 26
 - SP, 39
- IP アドレスの構成, 39
- KVMS, 8
- LED
 - 設置時, 22
 - フロントパネル, 9
- Oracle ILOM root パスワード, デフォルト, 26, 27, 29, 31
- Oracle Solaris
 - インストール, 32
 - 構成設定, 33
- Oracle Solaris OS の構成設定, 33
- PCIe EM, 8
- root パスワード, デフォルト, 26
- set コマンド, 39
- show コマンド, 39
- ssh コマンド, 27
- start コマンド, 27, 31
- UCP ケーブル, 17
- UCP コネクタ, 8, 9, 29
- USB 接続, 17
- VGA 接続, 17
- Web インタフェース, 26